

地区名	豊田	学校名	豊田市立御作小学校	執筆者	宇井 新
テーマ 単元名	地域の一員としての自覚をもち、主体的に課題解決する子の育成 — 5年「調べて⇒見つめて⇒広めよう ミネアサヒの魅力！！」の実践を通して—				

1 主題設定の理由

本校は、男子20名、女子20名の計40名で構成されている。本校では、生活科と総合的な学習の時間を「城ヶ峰学習」と呼んでいる。城ヶ峰学習では、1年生で「アサガオの栽培」、2年生で「虫の飼育」、3・4年生で「野菜作り」と「環境学習」、5年生で「米作り」、6年生で「地域の魅力発信」をテーマに学習し、地域に学び、地域とつながる活動を行ってきた。本学級は、男子2名、女子5名の5年生で、これまで、地域の名人からホタルの育て方や野菜の作り方を教えていただくなど地域に支えられる学びを進めてきた。地域の方との距離が近く、お互いに顔と名前を認識しており、地域全体で子どもを育てるという地域である。

入学以来、5年生の米についての学習を見てきた子どもたちは、自分たちもおいしい米を作りたいという思いをもって進級している。

5年生は普段は明るく、素直で、思ったことを正直に言うことができる。そして、行動力もあり、体験的な活動が好きである。また、月に一度開催する縦割り班活動の時には、学校のみんなに楽しんでもらえるようなイベントを企画したり、それを工夫したりすることができる。しかし、与えられた課題に対して指示を出されると取り組むことができるが、自分たちで課題を見付けて解決することや興味がないことには苦手意識がある。また、地域の方と関わりながら城ヶ峰学習を行ってはいるが、御作地区の特性、過去の災害などについて知識があまりなく、行事にも参加しようという意欲が低いといった一面がある。

そこで、地域教材を使って、子どもたちが大好きな体験活動を多く取り入れ、活動の中から課題を見付け、積極的に解決していくことを期待した。御作地区で生産され、「幻の米」と呼ばれているミネアサヒ作りを代かきから脱穀まで体験し、学習の中で発見した課題を解決していく。また、ミネアサヒの魅力やミネアサヒを育てる御作の米農家の努力や苦勞にも着目し、自分たちが地域のためにできることはないか考えていく。これらの活動を通して、地域の一員として自ら課題を見付け、見通しをもって解決していく力を育てたいと考えた。そして、地域の人との関わりや御作の自然を大切にしたいという思いをもち、学んだことを生かして主体的に行動することができる子どもの育成ができると考えた。以上のことから、主題を「地域の一員としての自覚をもち、主体的に課題解決する子の育成」と設定した。

2 研究内容

(1) めざす子ども像

- ① 自ら課題を見付け、解決することができる子
- ② 地域の一員として、地域に貢献することができる子

(2) 研究の仮説

仮説1

米作りや調理体験の中で、地域のヒト、モノ、コトを活用し、地域講師と何度も関わる機会をもてば、追究するための知識・技能を身に付けることができるだろう。

仮説2

地域の方の思いにふれ、協働して課題に取り組む場を設ければ、地域の一員としての自覚が芽生え、主体的に課題を見付け、課題解決することができるだろう。

(3) 研究の手立て

仮説1の手だて

- ① 田植えとバケツ稲の2つの方法で御作の米「ミネアサヒ」を作る。
- ② 米づくりの講師として地域の方と繰り返し交流する。
- ③ 「稲武の農業総合試験場・どんぐりの里いなぶ」で取材する。

仮説2の手だて

- ④ 地域の方の思いを聴く場を設ける。
- ⑤ 課題解決する方法について話し合い、行動する場を設ける。

(4) 抽出児童

	児童の実態	教師の願い
A児	自分の思いやこだわりが強く、独りよがりな部分もあるが、学級では影響力が大きい。体験的な活動が好きで積極的に参加することができる。	米作りの問題点を自分事として捉え、解決をめざすことを通じて、地域の一員であることを自覚してほしい。主体的に問題を解決する方法を考え、地域に貢献しようという気持ちを行動で表してほしい。

3 単元構想図（最終ページ）

4 研究の実際と考察

(1) 田植えとバケツ稲の2つの方法で御作の米「ミネアサヒ」を作る（手立て1ー①）について

年度初め、子どもたちが教室のロッカーに置かれた昨年度のミネアサヒの種もみを発見した。子どもはそれがすぐにミネアサヒであることに気付いた。子どもたちは、1年生の頃から5年生の米作りの学習発表を見てきている。しかし、米がどうやって作られているのか、米にはいろいろな品種があるのになぜ「ミネアサヒ」を育てるのか、そしてなぜ「ミネアサヒ」が「幻の米」と呼ばれているのかを理解している子どもはいなかった。これらのことから、今年の5年生も米作りを行い、実際に育てていくなかで米の作り方や「幻の米」と呼ばれている理由を見付けていくことにした。

過年度の5年生担任や、家庭科の教員、地域コーディネーターらと連携して活動を進めていった。そして、地域講師が所有している田んぼを借りて本格的な稲作体験と、毎日、学校で観察ができるバケツ稲の2つの方法で「ミネアサヒ」を作ることにした。

まず、地域講師の田んぼで田植えの体験をした。田んぼの中に入ると歩くのも大変で、まっすぐ稲を植えることの難しさや腰の痛さを感じた。一方、田植え機が登場し、自分たちが時間をかけて田植えをした何倍もの速さと美しさで田植えがされていく様子を目の当たりにし、機械化の必要性を実感することになった。

バケツ稲は、種もみから芽を出させることからスタートした。田んぼの田植えと同時に田んぼの土をもらい、育った苗をバケツに植え替え、栽培した。自分だけのミネアサヒを大切に育てたいという気持ちから、それぞれ名前を付けて毎週月曜日には学習用タブレットを使用して観察のデータを蓄積することとした。毎日観察することで、すくすく育っていく稲を見ながら喜びも囁



<田植えをしている様子 写真1>

み締めたが、問題も目の当たりにすることができた。台風がくれば風で倒れてしまわないか、暑さが続けば影響はないかと心配をしていた。実際に米が黒くなることがあったので、原因を検索し、暑さ対策や虫の駆除などを考える姿もあった。



<子どもの米成長記録 資料1>

米が実る穂ができ、小さな可憐な花が咲き、粳ができ、米が成熟していく様子を田んぼとバケツ稲の両方で観察した。やはり田んぼでの稲の方が豊かな実りとなったが毎日愛情を込めて育てたバケツ稲に愛着がわいたようだった。その後、収穫・脱穀・粳の乾燥・玄米から精米という流れを体験した。

(2) 米の講師として地域の方と繰り返し交流する（手立て1-②）について

インターネットで調べたことで疑問に思ったことを地域講師に尋ねる場を設けた。田んぼの前で聞く話は説得力があり、子どもたちは目を輝かせて聞いていた。稲を育てる上で、農家の方の工夫や技術について、子どもたちは自分たちの米作りの体験と関連させながら学習を深めていった。

インターネットで調べてみたら、「中干し」ということがあった。講師さんに聞いてみたら、「強い稲を作るために水の調整をするんだよ」と教えてくれた。天気に合わせて水の量を調整したり、水を抜いたりして稲を強くしているということを知って驚いた。

<A児の振り返りより 資料2>

(3) 「稲武の農業総合試験場・どんぐりの里いなぶ」で取材する（手立て1-③）について

自分たちで「ミネアサヒ」を育てた経験から出た『なぜ「ミネアサヒ」なのか』『なぜ「幻の米」と呼ばれるのか』などの疑問を解決したいと考えた。

調べる中で農業「農業総合試験場・どんぐりの里いなぶ」の存在を知り、取材交渉を行い、稲武に行った。研究員の方から、土地の気候や山間部で育てやすいのがまさに「ミネアサヒ」であること、育てる場所も豊田市山間部に限定されていて、収穫量が少なく、流通量が少ないことから「幻の米」と呼ばれる所以ということを知った。さらに、「ミネアサヒ」は甘さやうまみ、冷めてもおいしいという特徴があり、数々の米の中で賞をもらっているということを知り、「ミネアサヒ」の魅力に気付いた。また、御作よりも稲武の方が「ミネアサヒ」を誇りに思い、商品開発をしたりそれを使った料理をどんぐりの里で観光客に振舞ったりしていることを知り、大切にされている「ミネアサヒ」についてもっと知りたいという思いが強くなった。



<説明を聞く様子 写真2>

(4) 地域の方の思いを聴く場を設ける（手立て2-④）について

子どもたちは、「ミネアサヒ」を育て、食べ、「ミネアサヒ」の良さを知った。しかし、カメムシの被害から米を守る等、世話の大変さも実感した。体験をした今だからこそ、どのような思いで地域の方が「ミネアサヒ」を育てているのかを知りたくなり、地域の方の思いを聴く場を設け

た。地域の方の、世話の大変さのわりに利益が少ない、故に長い目で見た時に後継者がいないということが心配だという思いを聴き、子どもたちは、自分たちができることはないかと考え始めた。『自分で育てたことにより、愛情が湧いた大好きな「ミネアサヒ」を広めたい、大好きな地域の方を助けたい、「ミネアサヒ」のブランドを守りたい』という思いから、後継者を増やすことが使命だと強く感じていた。



<地域の方の話を聴く様子 写真3>

（５）課題解決する方法について話し合い、行動する場を設ける（手立て２－⑤）について

子どもたちは今までの体験でたくさんの知識を得て、地域の方の思いにも触れることができた。だからこそ、子どもたちは自らできることはないかと考えるようになった。そこで、自分たちにできることをクラスで考えた。「後継者を育てたい」という地域の方の思いを受けて、情報を発信する必要性を感じた。発信方法は看板に決まった。「後継者募集中」という看板を作ってはどうか、という意見が多数出た。しかし、A児の、「農家の方が困っている様子を伝えるよりも、『ミネアサヒ』の魅力を広めることが後継者不足解決への足掛かりになるのではないか」という考えをきっかけに話し合いが深まっていった。

「ミネアサヒ」の魅力を伝えるということを共通認識した上で、次のようなことを行った。まず、異学年に時間をもらい、「ミネアサヒ」について説明をし、米をふるまった。教職員には地域の方と作った五平餅を食べてもらった。



<学習発表会の様子 写真4>

次に、学習発表会で保護者に体験したことや得た知識の発表、おにぎりの試食会と米の販売、親しみやすいキャラクターを載せた看板のデザインをプレゼンした。保護者には看板を立てる位置や配色などの意見をもらったり、キャラクターを褒めてもらったりすることで、次への活動の意欲を高めることができた。



<看板設置の様子 写真5>

そして、学級でデザインの改善について検討し、保護者を買ってもらった米の代金を資金に看板を作成した。多くの方の目に触れるように観光客が多く駐車する藤の回廊駐車場とミネアサヒの田んぼ近くを設置の候補場所とした。自治区の方の許可をもらい、地域の方の協力を得て設置することができた。設置後、地域の人からは、「米作りをもうやめようと思っていたけれど、看板を見てこれからもがんばろうという気持ちになった。御作の子どもたちのために学習にも協力していきたい」という感謝の手紙をいただいた。子どもたちからは、「今回の看板設置によって後継者が増えたかどうかは分からない。でも、地域の人が喜んでくれて御作のミネアサヒは未来に繋がった。自分の子どもにも看板を立てたことを教えてミネアサヒの魅力を伝えたい」や「最後まで地域の方の支えで、多くの方に見ていただけたところに看板を設置することができ、卒業した後もこの看板を見るたびに、学習したことを思い出せる。多くの人にミネアサヒの良さを知ってもらい、ミネアサヒが今後もつくられ続けることを見守っていききたい」などという振り返りが出た。これらのPR活動を子どもたちが主体的に企画・実行していくことができ、子どもたちは自分たちの活動に対する自信や今まで学習してきたことへの充実感を得ることができた。子どもたちの満足気な顔が眩しく輝いていた。

5 研究の成果と課題

<成果>

(1) 田植えとバケツ稲の2つの方法で御作の米「ミネアサヒ」を作る(手立て1-①)について

田んぼでの米作りでは、農家の方の米作りの工程や米作りの奥深さを知ることができた。バケツ稲で「ミネアサヒ」を育てたことで、毎日、ミネアサヒの生長を見守ることができ、米だけでなくミネアサヒという品種に興味と愛情を感じることもできた。A児の感想「米作りの大変さやお米ができるまでにはいろいろな作業があることがわかった。ミネアサヒのことをもっと調べて、みんなに伝えたい」から、知識を得たことで追求したいという気持ちへとつながっていることがわかる。これらのことから、手立て1-①は有効であったといえる。

(2) 米の講師として地域の方と繰り返し交流する(手立て1-②)について

地域講師に米作りの工程での細かな配慮や作業内容を聞くことで、今の米作りの問題に気付くことができた。子どもたちの中には、「こんなにたくさんの作業があり長い時間をかけて作った米が災害によって一日でだめになったり、お年寄りが身を粉にして働いていたりすることがなんかもやもやした」と言い出す子もいた。自分たちにいろいろ教えてくださった方のために何かしたいという気持ちがうまれてきたことがわかる。このことから、手立て1-②は有効であったといえる。

(3) 「稲武の農業総合試験場・どんぐりの里いなぶ」で取材する(手立て1-③)について

ミネアサヒについての知識だけでなく、御作だけでなく豊田市北部だからできた品種であることを知ったり、ミネアサヒを作っている方のさらにおいしいミネアサヒを育てたいという強い思いにふれたりすることで、ミネアサヒについてもっと追究したいという思いが出てきた。子どもたちは、「私たちのブランド米だ」と言って、ミネアサヒの良さをもっと知りたい、早く食べてミネアサヒの良さを実感したいという思いにあふれていたことから、手立て1-③は有効であったといえる。

(4) 地域の方の思いを聴く場を設ける(手立て2-④)について

子どもたちは、この地域でしか育たないミネアサヒをこれからも絶やさず作り続けたいけれど、高齢化が進み、存続できるか不安に思っていることを知った。そして、私たちが何とかしないと、大人になったときにミネアサヒが消えてしまうという危機感も感じたようだ。自分たちで課題解決しようという気持ちがわいたことから、手立て2-④は有効であったと考える。

(5) 課題解決する方法を話し合い、行動する場を設ける(手立て2-⑤)について

今までの経験や地域への思いがあり、課題解決のために話し合いたいと子どもたちは考えた。いろいろなアイデアがどんどん出てきて、その中からできそうなことを選んで実践した。自分たちが卒業した後も地域に残る看板に誇らしそうだった。A児は「自分の故郷、御作のために活動できてうれしい。これからもミネアサヒの魅力をたくさんの人に伝えたい。」という振り返りをした。このことから、地域への愛情が深まり、地域の一員として、主体的に課題解決できたことがわかる。よって、手立て2-⑤は有効であったと考える。

<課題>

地域の方とたくさん触れ合う機会をもち、体験しながら学習できたことで、思いをもって探究学習をすることができた。そのため、得たものは多かったが、時間と労力がかなりかかってしまった。今回は模索しながら進めていたが、この授業内容を系統化し記録に残すことで引き継いでいきたい。「ミネアサヒ」についての体験や知識、地域や「ミネアサヒ」への思いは次の世代にも感じてほしいことである。また、看板を設置することで、地域の方がどんなことを思い、今後どんな効果がでるのかも検証していきたい。

単元構想図（全 6 6 時間） 「調べて⇒見つめて⇒広めよう ミネアサヒの魅力!!」

